

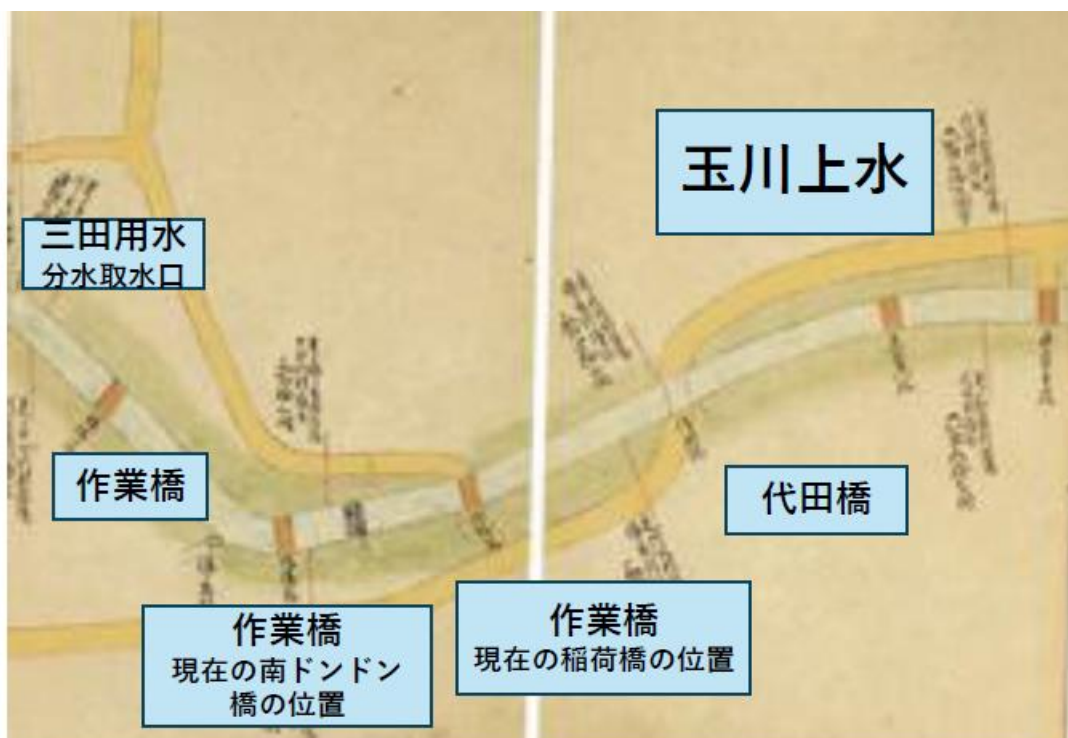
玉川上水・野の花だより No. 5 「上水記」と稲荷橋

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子 2026年 4月 23日

玉川上水については、寛政3年(1791年)、江戸幕府普請奉行上水方道方・石野遠江守広通によって著された『上水記』(全10巻)により、詳細に流路、分水網、橋名を知ることができます。次の図は、代田橋から稲荷橋、現在の南ドンドン橋(笹塚駅前)を経て、第三号橋から、三田用水の取水口がある笹塚橋までのエリアを示したものです。

稲荷橋は、現在でも、渋谷区と世田谷区の境界に位置しますが、その形態は江戸期から同じであり、幡ヶ谷村と下北沢村の境界に位置します。『上水記』には、作業橋としか記載されていませんが、隣接地に稲荷神社があり、橋名はこの神社にちなんだものと思われる。



出所：『上水記』第四巻：玉川上水羽村より四谷大木戸水番屋までの絵図。

東京都水道歴史館所蔵。昭和52年(1977年)4月5日、東京都指定有形文化財(古門書)に指定されている。

橋名は、確かに「稲荷橋」と漢字で記載されており、昭和2年11月に設置され、昭和35年に改修されています。橋名の記載は、通常、京都にのぼる方向の親柱は「漢字」、反対側は「ひらがな」が原則となっていますので、「稲荷橋」は、これを継承しているものと考えられます。

開渠部の自然環境は、極めて華やかで、百花繚乱であることを御紹介いたします。稲荷橋直下には、クレソン（オランダガラシ）、オオアマナ、菜の花、ホトケノザ、シャガ、クサボケ、オオジシバリ、そしてオオアラセイトウ（諸葛菜）等が生育しており、ソメイヨシノの古木、ケヤキ、ニセアカシア等の大木が、これらの草花を優しく、包み込んでいます。（2026年4月18日 撮影）



稲荷橋から第二号橋方向を見る

稲荷橋（漢字）の親柱



クレソン（オランダガラシ）



オオアマナ



菜の花



オオジシバリ